# 民衆を信ぜず、しかし民衆を信じる……

## ――見通しを考える場合の視点、H・ジンの自伝など――

吉川勇一

本誌前号の「読者のおたより」欄に左枠内のようなお便りが掲載されていました。

確かに、教育基本法改悪、自衛隊の戦場派兵の継続、教科書検定による一方的改定命令、防衛庁の省昇格、集団的自衛権承認への強引な志向、国民投票法の強行採決……と、政府の高姿勢ぶりは眼に余るものがあり、それにこの春の東京都知事選挙での石原慎太郎の圧勝という結果もあって、運動の無力さを感じる気持ちが出てくるのも無理はないなという思いがします。「そうだよな」という感じを抱いた読者の方も少なくはなかったのではないでしょうか。これが、年配者の気弱な愚痴などと切り捨てられるようなことがあってはならない、と私は思いました。

◆ただいま82歳。疲れました。展望も開けないのに、仲間うちだけで声を大きくしても空しいのです。好戦派の元気のいいのと闘う力を下さい。（4月9日）秋田県鹿角市・T・Y（92年入会の15年会員）

◆東京都知事選挙の結果に、皆さんも将来の不安を感じられたのではないでしょうか。本物がわからないと偽者を本物にしてしまう。本物がわかる力に、どのように育つのでしょうか。私にとっても大きな課題です。（後略）（4月19日）兵庫県龍野市・M・H（04年入会の3年会員）（括弧内）は編集部

### ◇参議院選挙の結果は？◇

この原稿を書いている今は参議院選挙の真っ最中ですが、お手元に届くときは、すでにその結果が出ている時期です。

選挙前のマスコミの世論調査は、一斉に安倍政権への支持の急落を伝えていました。でもそれは、あいつぐ閣僚の不明朗な金銭問題や「原爆しょうがない」発言などによる辞任や自殺、そして年金問題など、いわゆる「敵失」（相手側の失敗、失態）によるものであって、運動や反自民勢力の力の増大によるものとは必ずしも言えませんでした。

世論の表面的動向が、選挙結果にそのまま反映されるとは限らず、投票行動となると、縁故関係や目先の利益に左右されてしまう場合も多いのです。それに、マスコミは2大政党制をあおり続けており、この選挙で仮に民主党が与党勢力を抑えて伸びていたとしても、改憲への道が閉じたわけではありません。民主党議員の中には、自民顔負けの武装論者もいるのですから……。

いま、悪い冗談も言われています。いつも決定的瞬間に北朝鮮はテポドンを発射したり「不審船」を日本近海に送り込んだりと、まるで自民政権に助け舟を出すようなことをよくやってきた。今度だって何が出てくるかわからんぞ、というのです。確かに、そんなことでもあれば、選挙の結果にかなりの影響を与えていたことでしょう。

「読者のおたより」欄に載ったT・Yさんのような気分は、選挙の結果如何で、いくらか和らげられたかもしれませんし、あるいは逆に、いっそう絶望的なものになっているのかもしれません。

見通しについての文を書くには、かなり都合の悪い原稿締切の時期なのですが、このT・Yさんなどのお便りについて、私の考えをのべてみることにします。

### ◇もっと長い期間で考える◇

私は、もう少し長い期間を基準にして政治や運動や民衆の力の問題を考えてみたいのです。長いというのは、極端に言えば200年、それ程でなくても、50年といった期間です。

200年と言ったのは、アメリカの反戦

活動家で言語学者のノーム・チョムスキー（78歳）の言葉を思い出したからです。彼の講演を記録したドキュメンタリー映画で見たのですが、講演のあと、帰ろうとするチョムスキーに多くの参加者が質問に押し寄せます。そのうちの1人の黒人が、「あなたはなぜそんなに楽観的でいられるのか？イラク戦争など、アメリカの政治はどんどん悪化しているというのに……」と尋ねます。それに対し、チョムスキーは「アメリカの歴史が悪化しているとは思いません。もし昔のほうがよかったというのでしたら、あなたは200年前の奴隷制時代に戻りたい、というのですか」と答えます。質問者の絶句した顔も忘れられません。

## ◇ハワード・ジンの自伝◇

200年があまりにも長すぎるというのでしたら、50年くらいにちぢめてみましょう。チョムスキーより少し年上ですが、いまもイラク反戦の論壇で活躍し続けている私の古い知人、政治学者のハワード・ジン（85歳）の例です。彼の著作では、『民衆のアメリカ史』が大ベストセラーですが、ここでは彼の自伝的作品『走っている列車の上で中立ではいられない』をご紹介します（これは原タイトルで、邦訳では『アメリカ同時代史』というつまらない書名になっており、自伝とはちょっと思えない題になっているのですが……。明石書店97年刊）。

ジンは劇作家でもあり、この自伝的作品は叙述自体が実に劇的というか映画的です。彼はまず「序　質疑応答の時間」の中で、92年の大統領選挙の際、ミシガン州で行なった講演会での質問を紹介します。「現在、全世界で起こっていることは嫌なニュースばかりなのに、あなたは信じられないほど楽観的でいらっしゃるようですが、あなたに希望を与えているものは何ですか」

ジンは、それに一応の答えを言います。

……人間の性質は多種多様ですが、そのなかの一番悪い要素が、多くの場合強調されるのです。その結果我々は勇気を失い、精神が萎縮してしまいがちなのです。勝ち目がまったく見られない状況の中で、自由と正義を求めて戦い勝利したという例は歴史のなかにたくさんあります。……正義を求めるこのような闘争に一番重要な要素は、ほんのちょっとの間でも、恐ろしさに震えながらも、一歩前に踏み出して、たとえ小さなことでも何かをする人々なのです。まことに小さく、恐る恐るおこなう行為であっても、集まれば導火線となって、思いもかけない状況が生じ、ものすごい変革へと移る可能性があるのです。……（16ページ）

## ◇小さな行為が集まって世界を変革する◇

しかし、つづけて「序」の中では、「彼（質問者）に正確にこたえようとすれば、我々が知っているこの世の中の現実の前で、私がどうして不思議なほど希望にあふれていられるかについて、とても多くのことを話さなければならなかったであろう。私の人生のはるか昔までさかのぼらなくてはならなかったであろう」と書きます。

18歳のとき、造船所で働いて軍艦建造の仕事を3年間やったこと、21歳のとき空軍に志願して爆撃兵となり、欧州戦線での爆撃に参加したこと、そして結婚、大学への通学、アメリカ南部の黒人社会の中に住んで、教職についたこと、公民権運動やベトナム反戦運動に参加したことなどなどを語らなければならなくなるのだ、と言います。

こうして、自伝が語り始められます。「映画的」といった理由です。以下、具体的エピソードを挟みながら、感動的な叙述が続きます。そして最後の章で、次のように結論します。長いですが、引用します。

……政治権力はどんなに強大であっても我々が考えているよりずっと脆いものである。（権力を握っている人々が、いかに神経過敏になっているかを考えて見よ。）

短期間なら、一般の人々は脅かされもしよう、騙されもしよう。しかし彼らには常識がしっかりと根を張っていて、遅かれ早かれ、自分たちを弾圧している権力に立ち向かう方法を見つけることができるのだ。

人間は本質的には、暴力的でも、残酷で

も、強欲でもない。ただそうなるように仕向けられればそうなるのだ。……

……革命的変革は、激動の瞬間という形でやって来るものではなく（そのような瞬間には用心せよ！）、びっくりすることに絶えず出会いながら、よりましな社会に向かってジグザグ行進を続けていきながら実現するものなのである。

変化の過程に参画するために、偉大な、英雄的な活動をする必要はないのである。小さな行為でも、数百万の人々が集まれば、世界を変革することができるのである。……（298～299ページ）

翻訳はあまり上手とは言えないのですが、読む価値の大きな本としてお勧めできます。

### ◇日本の運動の例では？◇

アメリカの例ばかり長く書きましたが、このジンが述べているような事実を、私も50年以上になる日本の運動経験の中で、いくつか体験しました。1956年の砂川基地拡張反対闘争や1972年の相模原での戦車輸送阻止闘争に関係したことなどなどです。そのことからも、私はこのジンの意見にまったく賛同します。ただ、それはいろいろなところにすでに書きましたし、紙面の都合もありますので、ここでくり返すのは遠慮します（ご覧になっていない方で、希望されるのでしたら、切手を貼って宛名を書いた返信用の封筒を、本会事務局宛にお送りくだされば、プリントしてお送りします）。

### ◇民衆を信ぜず、しかし民衆を信じる◇

結論的に私の意見をのべれば、「民衆を信ぜず、しかし民衆を信じる」ということになります。短期的には、民衆は騙されたり、恐怖したり、目先の利害に左右されたりして、誤った判断をし、誤った行動をとることがままあります。しかし長期的に見た場合、民衆の動きは信頼でき、よりよい方向への歴史の流れを確認できます。長期的とは、少なくとも50年単位で考える必要があるでしょう。先にふれた砂川闘争の影響を実感したのは、1998年のことで、42年も経った後のことであり、相模原闘争のそれも30年後のことだったのです！

署名や集会や意見広告やデモなどの効果も、すぐさま眼に見える形で現れることはほとんどないといっていいでしょう。しかし、それは確実に、歴史を動かしていく底部での力をつくり出しているのだと、私は信じます。

### ◇良心的不服従の心構えも◇

本誌の97号で、鶴見俊輔さん（85歳）は、加藤周一さんをはじめ「九条の会」の呼びかけ人は、みな、厳しい見通しも持っているとのべられ、国民投票で敗北したらどうするかという問題まで提起されていると話されていました。50年先はともかく、あと4～5年先にそんなことになったらどうするんだ、という心配をされる方もいるかもしれません。

鶴見さんは「大きな少数派」として活動を続ける、と言われていました。同じことなのでしょうが、私は、生き方として良心的不服従の姿勢を貫くことだと思っています。政府の政策や法律の規定がどうであれ、不正を許さず、絶対に戦争には協力せず、不利益があろうとも自己の良心に忠実に生きる――そう心構えを決めておくことも、穏やかになれる大事な方法だと思います。

最初に触れた「読者のおたより」に「疲れました。……空しいのです」と書かれた鹿角市のT・Yさんは82歳ということですから、私より六年も人生の先輩です。確かに75歳を過ぎると、お互い肉体的な衰えと疲れは確実に訪れます。

でも、加藤周一さん（88歳）は雑誌『世界』8月号に載せた講演記録「老＝学連帯が開く未来」のなかで、学生とともに、定年後の老人は自由であり、「老人の自由万歳ですよ」と語っています。

年配の方は、痛む肩を叩き叩き、しかし、自由に、長い歴史の動きを考えてみませんか。ジンの自伝でも読みながら……。

そして若い学生さんも、この加藤さんのアピールに答えて、「老＝学連帯」を考えてみてくれませんか。（2007年7月12日・記）

**（よしかわ・ゆういち**、本誌編集委員）